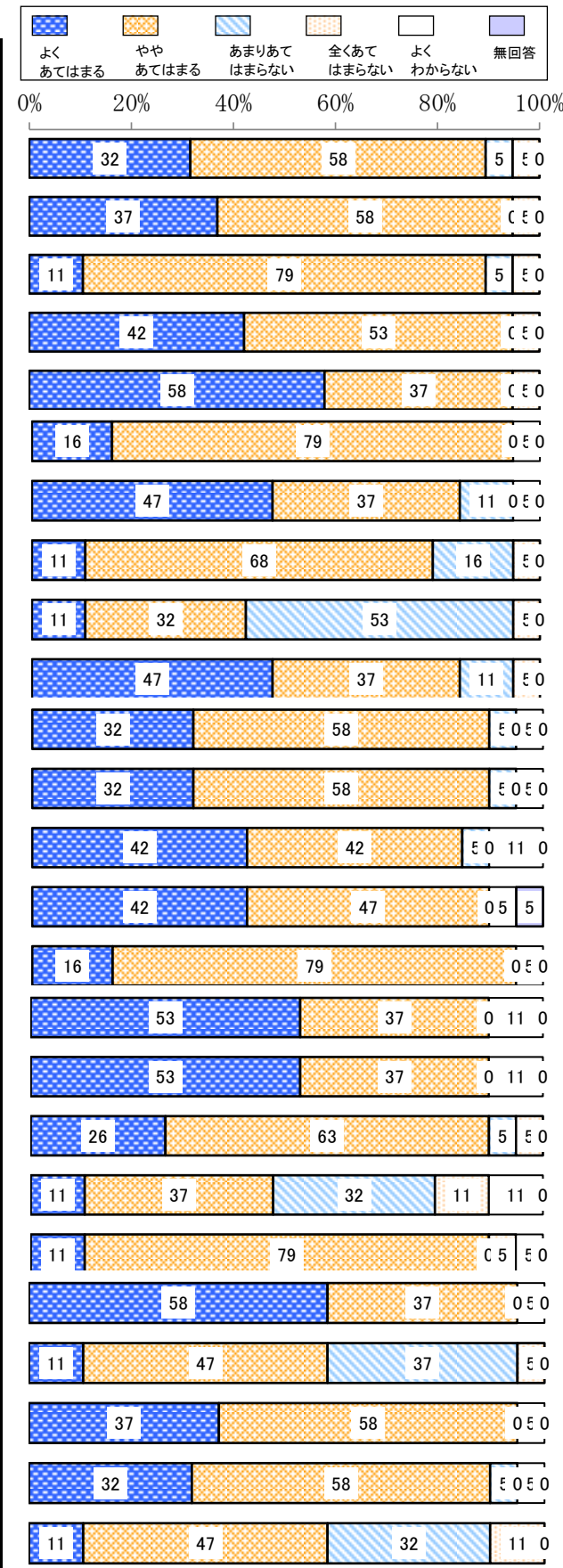


アンケートの結果			上段：児童 下段：保護者等 グラフ：教職員					
			A	B	C	D	よく分からない	無答
学校全体の様子	1	教育目標・方針	10	43	35	4	9	0
	2	児童・生徒の様子	13	65	12	1	8	1
	3	基本的な生活習慣	27	60	8	1	4	0
	4	児童・生徒理解	59	32	6	1	1	0
	5	安全・安心	25	57	16	1	1	0
学力向上の取組	6	分かる授業	17	43	29	5	7	0
	7	個に応じた指導	16	59	15	2	8	0
	8	学習習慣	26	45	20	3	5	1
	9	情報教育	31	56	4	3	6	0
	10	読書指導	7	47	28	1	16	0
社会性・人間性の育成	11	人権尊重教育	30	38	17	5	9	1
	12	道徳教育	16	58	14	1	11	1
	13	教育相談	6	24	45	17	8	1
	14	体験活動	8	39	38	4	11	0
	15	自治的な活動	13	48	23	11	5	1
保護者・地域との連携	16	情報発信	5	47	24	5	20	0
	17	相談への対応	8	40	30	16	7	0
	18	学校への参加	19	55	17	2	8	0
	19	地域への参加	26	44	20	3	6	0
	20	意見の反映	14	53	16	1	16	0
各学校の特色ある教育	21	外部人材活用	28	40	16	5	10	1
	22	食育	16	61	9	2	11	1
	23	キャリア教育	17	29	31	12	10	2
	24	健康教育	13	49	18	2	18	0
	25	地域連携	59	29	10	1	1	0

無効票を除く(%)



無効票を除く(%)

学校の自己評価（考察）

・「学校全体の様子」のうち、教育目標、方針（1）と安全、安心（5）については、教職員、保護者、生徒の順にポイントは下がる。判断する基準が生徒からすると難しいためとも思われるが、この傾向は他のいくつかの項目にも見られる。こうしたなか、特徴的なのは、異なる結果を得た項目（2）（3）である。生徒自身は、基本的な生活習慣を身に付けていると91%の者が肯定的に回答し、明るく素直に生き生きとした学校生活を送っていると回答した結果は生徒・教職員とも類似している。これは、多くの生徒が前向きに学校生活を送ろうとする意識が数字になって表れたものであり、自発的・自治的な活動においても、教職員より生徒の方が良好であるとしている。これらのことから、今後、学級活動や生徒会活動を活性化させ、より高い目標を生徒自ら掲げさせ、学校をよりよくしようという気運を高めていくことが有効な手段として考えられる。

・しかし、生徒理解（4）や教育相談（13）においては、生徒は満足しておらず、生徒と教職員の認識の差も大きい。教職員が生徒に関わる時間はかなり多くなっているものの、すべての生徒に対して教育相談を踏まえた関わりは十分でないことを示している。二者面談等をふくめ、個々と接する時間を計画的に設定していく必要がある。

・また学習においては、過半数を超える生徒、保護者が分かる授業、個に応じた授業を受けているとする一方、三分の二近くの生徒が補充学習や家庭学習の定着に向けた援助を必要としており、授業改善とともに取り組みを強化すべきところである。

・75%前後の保護者においては、学校の様子（16）が分かり、授業参観や行事に参加（18）しているとともに、相談や連絡をした際、迅速に対応してくれる（17）としている一方、意見や要望を学校運営に反映してくれると回答した保護者は47%にとどまり、よく分からないとした回答は33%にのぼる（20）。意見や要望に対する対応について、随時明示し、発信していくサイクルを築く必要がある。

・最後に、三者（生徒、教職員、保護者）ともに現状に対し共通した認識を持った項目として（11）、（12）、（14）、（19）があげられるが、体験活動（14）のように高いレベルでの類似と、地域への参加（19）のように低いレベルでの類似がある。低いものについては、改善策をたて、具体的な計画のもとに、向上を図っていかねばならない。

